

「魂の指揮官」

～あなたは赦し、愛していますか～

コロ3：12～16

南アフリカのマンデラ大統領を知っているでしょうか。彼は27年間政治犯として投獄され苦しい兵役を課せられましたがその中で看守たちに愛され、その後、大統領となりアパルトヘイトという差別を脱却した人です。あなたは、悪い出来事が起こったとき、どのように乗り越えてきましたか。人のせいにするのは簡単です。しかしマンデラさんはその悪いことをした人を憎むのではなく、その悪いことがおこる背景を変えようとしたのです。この苦しい差別を脱却できたのは彼の神様への強い信仰心だったのです。「やられたことをやり返す」私たちはそう思うてしまいますが彼は違う方法（赦していこうという政治）をしたのです。「苦しめられた攻撃に対して愛で返す」というマンデラさんの一途な思いがアフリカを変えました。その彼が大切にしていた詩の一節に「私が我が運命の支配者、私が魂の指揮官なのだ」と言う言葉があります。自分に悪いことをする人に対してその怒りに負かされるということは心のうちに指揮官がないということです。あなたは自分に悪いことをする人を嫌い、憎んでいるかもしれませんが、されたことと同じ事をするならあなたもその人と何ら変わりありません。自分に対して悪くする人によく接しようとするのはとても難しいことです。しかし同じことをすればそこに何の解決もありません。特に日本人は、憎しみをぶつけることもなく、その人と関わることをやめてしまいます。「もう言っても無駄だ」「自分は関係ない」とあきらめてしまうのです。しかし「愛」の反対は「無関心」です。私たちはその人のことを「愛する」と口では言います。しかし思い（不満）があるのにそれを心の中で憎しみに変えて閉ざして、その人には笑顔で接する・・・これは本当に正しいでしょうか。私たちにとって問題なのは憎しみです。憎しみを抱いたままで私たちは自らでよい環境を見出すことはできません。「自分は憎しみなんて・・・」というかもしれませんが、憎しみのない人はいません。しまっているだけで解決していないのです。だから嫌なことを受けると、心に閉まって人と線を引いて関わらないようにしているのです。（コロ3：12～16）ここからアフリカの国歌ができました。自分が嫌なことから逃げて物事を否定して無関心になることは簡単です。しかし神様は言っています。「互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。」（コロ3：13）私たちの持つ不満とはただの「怒り」です。私たちは不満があっても相手には言いません。意見を言うことは対立だと思っています。「意見を言うこと」は「不満」（怒り）であり、怒りを表現することを日本人は嫌います。そしてその人に意見をいう時には、その人のことを嫌いになってから言うのです。その人の行動が赦せないのではなく、人格が嫌いになってしまっているのです。不満を抱いたのであれば、それを「怒り」にせず、「変化」にしないとはいけません。そこで自分の意見（不満）が発生したとき、あなたはどうか行動していますか。「イヤだな」という思いにしているか、それともそれを「どうにかしよう」としているか・・・私たちにとって「不満」がすべての問題の始まりなのです。不満はすぐに怒りや憎しみにはなりません。「欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます。」（ヤコ1：15）不満が重なっていくと段々それが憎しみに変わってしまうのです。私たちは魂の指揮官です。魂とは「知識（経験してきたもの）・意志（自分はこうしたい）・感情」つまり心の内側の思いです。不満は私たちの魂の部分で腐食していき、心がどんどんブロックされていきます。そこで意志は「こうしたい」と思っても感情でブロックされコミュニケーションがとれなくなってしまうのです。私たちの中で不満が憎しみに変わっていないか、確認しなくてははいけません。不満がたまった心では正しいことはできません。魂の指揮官の職務とは**①自分を赦し、愛する。**人に対する不満は、大概自分に対する不満です。その人の嫌いなところは、自分の嫌いなところなのです。しかし自分にとって自分のイライラする所は、神様が私たちを創造したときに良い部分として与えてくれたものなのです。その使い方が悪いのです。私たちは自分の短所を短所として決め付けてしまっています。不満は物事を決め付けるといふ悪い要素があります。自分の悪い部分も変化として用いればよいのですが、良いものとして用いず、自分に対する自信のなさから相手を傷つける言葉をはくのです。だから神様は『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』と言っているのです。自分を愛せない人は隣人を愛することは絶対できません。自分を愛していない人はその愛せない愛で隣人を愛するからです。だから人の不満を見つけては人を指差し、言ったあとで自分を3倍傷つけ、神様を冒瀆するのです。できない自分を愛せと言っているわけではありませんが、そのままの姿の自分で出てくることで、問題が問題でなくなり、できる自分に換えられるのです。自信のなさから人は物事ができなくなります。あなたは自分がすばらしいということを理解していますか？神様はあなたを創造した時「素晴らしい」と言いました。そしてそれは今の今まで変わりません。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。」（イザ43：3）愛された人は何を愛されたか気付かなくてははいけません。誰も同じ人は一人もいません。だからあなたがあなたであるすばらしさを、ぜひ見つけてください。あなたしかできないすばらしい能力があるのです。だからこれまで自分が失敗してきたことを神様と一緒に赦してください。**②隣人を赦す＝他人事にしない。**私たちは「赦す」というと相手の悪い行動のまま受け入れろという風に思ってしまう。「相手は悪くない、お前が悪い」と聞いてしまうのです。謝ってしまうと、自分が悪かったことを認めてしまうように思ってしまうのです。でも喧嘩両成敗といわれるように、どちらかだけが悪いと言うことは絶対にありません。赦すと言うのは、自らの悪かったことを認めて、相手に対して無関心にならないということです。自らの悪かったことは言い方であり、接し方です。神様が言っているのは、相手に「ごめんなさい」という時に、相手の悪かったことまで受け入れろということではなく、まずは自分の悪かったことを真剣に見て改めるということです。そうなるには必ず原因あるからです。その上で他人事にしないとは、その人と向き合うということであり、そこに解決があるのです。関わらなくてよいことに関わるから変化があるのです。愛するためには赦すことが必要です。「私は自分のこの部分と向き合います。だからあなたもこの部分と向き合ってください。なぜならあなたが大切だからです。」そうしてみてください。もし突き放した人がいるなら、「話すきっかけを与えてください」と祈ることから始めてください。これが「愛」です。神様はチャンスを与えてくれます。憎しんで生きるのは簡単ですが、赦すことを選んで祈りを捧げてください。**③マイナスをプラス（愛）で返す。**プラスはすべて「愛」です。相手に対して興味を抱くのは愛の象徴です。「包み込む」これが「母性」です。「ヤハウエ」・・・これは女性の乳房を現して「包む」という意味があります。あなたはその人のことが必ず気になるはずですが、でも相手が激しい反応をするから「もういい」となるのです。「赦す」とは母なる力です。だからマイナスを、愛を使ってプラスで返してあげてください。これは男性にも必要で、男性の「責任」につながります。あなたの心の中で、あなたは「指揮官」になってください。自分に刃を加える人に対して、自らに刃を加えて自らの行動を制御してください。それがイエス・キリストがしたことです。（ピリ2：13～16）あなたはその場所で輝くために選ばれました。現状や、過去に様々なことがあるかもしれませんが、でも神様はその過去や現状があるから輝けるのだと言っています。今までの過去をよいものに変えてください。マンデラ大統領も辛い過去を喜びに変えました。そのためにもあなたの不満を神様の前に降ろしていきましょう。（要約者：岩崎祥誉）